PDF Compressor Free Version

ふるさとの歴史 こぼれ話 Vol.17

「岐阜公園物語」②（戦後編）

―昭和30～40年代　子ども達の楽園に―

昭和20年（1945）8月15日、長かった戦争が終わりました。人々は貧しい暮らしの中で、新たな希望と明るさを求めていました。

そんな中で、岐阜公園はどのように生まれ変わり、市民や子ども達に親しまれるようになったのでしょう。

1. 岐阜公園の人気施設が復活

現在の板垣退助像

第二次世界大戦の激化に伴う金属回収で、昭和17年（1942）に「噴水の女神像」が、昭和18年（1943）に「板垣退助像」が姿を消していました。

岐阜新聞社が再建を提唱し、昭和25年（1950）5月3日、現在のロープウェイ駅の下（井戸付近）に「板垣退助像」が再建されました。

さらに昭和26年（1951）10月26日、「女神像」が、9年ぶりに再建されました。こうして、戦前の岐阜公園の人気施設が復活したのです。

2. 新しい目玉施設の開館

昭和25年（1950）9月1日、日本で初めて岐阜公園に「淡水魚水族館」が開館しました。館内には24の水槽および大プールがあり、鵜飼につきもののアユをはじめ、オオサンショウウオ・ニジマス・ウグイ・カワムツなど淡水魚18種類が飼育され、とくにオオサンショウウオは注目を集めました。

（その頃・中学生だったKさんの話）

岐阜市南部に住んでいた私は、水族館の魚を見たくなるたびに自転車で岐阜公園へ行きました。水族館の中央にプールがあって、なぜか大きなウミガメがいました。

建物の外周はガラスの観察水槽になっており、アユやコイ・フナ・ウナギなどがいました。オオサンショウウオは右手にいました。夜行性なのでいつ見ても動きません。小さな目がありましたが、よく探さないと分かりません。毎度決まって、ガラスをたたき、「目玉探し」をしたものでした。

岐阜市児童科学館

終戦後10年を経過して、昭和30年（1955）7月、岐阜市は、青少年の科学教育、市民の科学知識の向上を目的として、「児童科学館」を現在の来園者休憩所付近に開館しました。

当時はラジオでも真空管が普通でしたが、「電子ピアノ」などがおいてあり、鍵盤を押さえると「宇宙から届いたような音」が聞こえました。

3. 金華山の観光開発（昭和30年代）

まだ戦後の厳しい状況だった昭和25年（1950）、岐阜市は「金華山の総合開発計画」を策定しました。その中心事業・普通失業対策事業として、「金華山ドライブコース」の建設工事に着工しました。人力で岩を削り、幅6メートルの道路を延べ25万人をもって13年後の昭和38年（1963）3月に開通しました。

また昭和30年（1955）4月14日には前年から取りかかっていた「金華山ロープウェイ」も開業しました。この開業について、新聞（岐阜タイムス）は、次のように書いています。

金華山の索道架設計画は岐阜市民30年来の夢で幾度か計画されながら今日まで実現を見るに至らなかったが、ようやく実現したものである。いずれにしても、これこそ人工の天の浮橋、雲の桟橋ともいうべきもので、観光岐阜に一名所を加えたことは喜びに堪えない。

金華山ロープウェー

翌年の昭和31年（1956）岐阜城が再建され、7月25日、岐阜城の落成式が行われました。当日の新聞は、その様子を次のように書いています。

再建された岐阜城

岐阜城の落成式はきょう午前9時半から金華山頂の南側広場に関係者250名が集まって華やかに行われるが、本社でも午前8時、空から岐阜市民にメッセージを贈るのを皮切りに、ブラスバンドの市中行進をはじめ、十大祝事業を催して、郷土岐阜のシンボル・岐阜城の完成をお祝いする。

4. 市民・子ども達に親しまれる公園

昭和32年（1957）岐阜公園内（金華山トンネルの南）に県立図書館が完成しました。こうして、岐阜公園は、名和昆虫館や淡水魚水族館、児童科学館などと共に、「楽しみながら学ぶ場」となりました。

またこの頃から、いろいろな動物を飼育したり遊具を設置したりして、動物園・遊園地として整備されていきました。そして「子どもと親が一緒に遊べる公園」「市民のレクリエーションの場としての公園」となりました。そして写生大会なども行われ、岐阜公園は文字通り、多くの市民に親しまれる公園になりました。

（その頃・小学生だったSさんの話）

春や秋には、決まって学校から写生会に出かけました。

サル舎は半球状の金網でできていて、ニホンザルが十数匹いました。

脇にヤツデの木があり、その葉を折り取り、長い葉柄を金網の目から突っ込み、サルの背中や尻を突くとサルは歯をむいて怒り、「ハッー」と威嚇してきます。こっちも金網があるので安心していて、「ハッー」と歯をむいて威嚇します。金網を挟んで内と外でサルと人間が「ハッー」「ハッー」と威嚇し合うのです。肝心な絵の方は家での「宿題」となりました。

岐阜公園・春の写生大会

（長年、岐阜市公園課などに勤務されたYさんの話）

当時の市長が「名古屋まで行かないとライオンや猛獣が見られないのは子どもがかわいそうだ」と、東山動物園からライオン一対とペンギン4匹、鹿一対を譲り受けました。またインコ、大ツル、白鳥、ペリカン、フンボルト**ペンギン、長江ワニ、日本猿など多くの動物を飼育し、名実ともに「動物園」となりました。**

さらに音楽堂（現在は加藤栄三・東一記念館の所）、子ども遊園地もでき、子ども達・大人の楽しい場所となりました。そして遠足に、写生会や勉強にと、毎日多くの子どもが訪れ、市民・県民及び観光客にも親しまれました。

ライオン舎前やペンギン池前の賑わい、音楽堂の舞台で楽しく食事している子ども達、すぐ北の鹿舎で仲良く遊んでいる親子鹿を見ている幼児の姿等、今も懐かしく思い出されます。

昭和59年（1984）より、公園整備の一環で音楽堂が取り壊されました。鳥類は畜産センターに引っ越し、小動物は県内小・中・高校等へ譲り渡されました。オオサンショウウオ等も神奈川県や上野動物園等、いろいろな所へ引き取ってもらいました。

平成11年（1999）の6月、全ての動物舎と水族館が解体されました。

動物園となった岐阜公園

5. 終わりに（歴史公園への変貌）

昭和60年（1985）、歴史博物館が開館し、昭和62年（1987）の「岐阜市制100年」を記念して、岐阜公園を歴史公園に再整備しようという計画が立てられました。

それに先立ち、昭和59年（1984）から62年（1987）にかけて、岐阜城跡遺構の有無を確認するため、千畳敷等の発掘調査が開始されました。その後も場所を拡げて調査し、信長居館跡の様子等、多くの事が分かってきました。その結果、発掘調査や信長居館跡の様子を知りたいという観光客も多く見られるようになり、平成21年（2009）の秋には総合案内所も完成しました。

平成23年（2011）、公園の一部が史跡「岐阜城跡」に指定され、「信長の鼓動が聞こえる歴史公園」として再整備が進められています。

この文章は、「岐阜市史・現代」（通史編・史料編）「岐阜市民のあゆみ」「手記・岐阜公園の今昔」などをもとに、後藤征夫がまとめました。

岐阜市歴史博物館ボランティア
「お話・岐阜の歴史サークル」
代表　後藤　征夫
http://book.geocities.jp/gifurekisi/rekisitop.htm
TEL058-231-6726